

人間が人間らしく生きていくために

―高い学校文化の中で豊かな学びを―

語り手 小島敏夫（元校長） 聞き手 松田藍那

立命館守山高等学校教員時代

―この学校に就任されて、どのような印象を持たれましたか。

この学校は、もともと守山市立守山女子高校だったのはご存知ですか？そこから立命館学園に移管されたのですね。だから開校一年目は、立命館守山高校から入学した一年生と、守山市立守山女子高校二年生・三年生と一緒に新学期をスタートしました。そういう意味では、珍しい学校かなというふうに思っています。

しかし、そのような中でも、生徒はみんな仲良くてね、一つの学校として一体となって、さまざまな活動を展開してきたのです。

―教師として就任されたのは、こちらの学校が初めてだったのですか？

僕はね、初めは立命館宇治高校にいました。

でね、新しい学校を創るということで、立命館宇治高校から立命館守山高校設置準備室に配属されて、学校創りを担当させてもらいました。だから、守山女子高校の伝統を継承しながら、新たな立命館の四番目の附属高校として、どのような学校を創っていくのか、というところから関わっています。

―そうなんです。その当時から大切にしてた教育方針はありますか？

あの、受験教育というんですかね。

高校は大学に入るための勉強をするところ、という位置付けで見る人もおられます。今もその傾向はあると思います。

大学を出るまで見通した一貫教育というよりも、大学に入るまでの教育が主に展開されている傾向があります。最近ではそうでないところもあるかもしれませんが。

大学に入るための勉強も大事なんだけど、大学を出るまでにどのような力をつけるのか、そういう視点で様々な知識、豊かな教養や感性、語学力や国際性をこの学校で身につけて欲しいですね。

立命館守山の高い学校文化の中で、豊かな学びを展開してほしいと思います。

―先生が教育されてきた中で、立命館守山の生徒にどんな印象を持っていますか。

僕ね、真面目だと思います。本当にひた向きで、真面目にコツコツやるという面と、自分の進む道が見えたら、夢に向かって一生懸命に頑張るという生徒がたくさんいる学校だと思います。

立命館守山中学・高校の色々な活躍を見えていますとね、みなさんそれぞれの夢を実現されるために一生懸命奮闘されているのが、よく伝わってきます。

―いろんな生徒と関わってきた中で、印象に残る出来事とかってありますか。

いろんな思い出があります。

立命館守山中高生は、中高大一貫教育の優位性をうまく生かして、正課活動でも課外活動でも優れた実績を挙げていますね。

たとえば、ロボットコンテストやプレゼンテーションなどで活躍しているサイテッククラブは、印象に残っています。

―先生もサイテック部を担当されていたと聞きました。

顧問ではなかったんですけどね。体育館を部室にして、ロボット制作や研究発表をしていましたね。

あと、印象に残っているのは、あれは二〇一〇年二月だったと思います。立命館守山高校がホスト校になって「高校生国際みずフォーラム in 湖国・滋賀」を開催しました。海外八ヶ国から十一校、国内から九校の高校生や市民の皆さんが守山市に集い、世界の水問題の解決に向けて、プレゼンテーションやポスターセッションで研究内容を交流しました。準備からフォーラム運営、共同宣言の採択まで、このみずフォーラムを支えたのは、立命館守山高校生が立ち上げた「世界みずフォーラム運営委員会」でした。地域に学び、世界に発信する、素晴らしい活動でした。

―それは先生が担当して？

立命館守山高校生が実行委員会を組織してね。その活躍が、一番印象に残っていますね。

―教員時代、一番大変だったこと、苦しかったことは何ですか。

生徒の悩みを聞いた時にね、一緒に考えるんやけども、答えが出ないこともあります。最終的には、その人の判断に任せたこともありましたね。

先生は、どこまでアドバイスできたのか。「あの時、もうちよつとアドバイスできていたら、あの生徒はもっと違う道を歩んでいたんじゃないか」と思うこともありましたね。

教える、指導するっていうのは、偉そうな言い方やけど、寄り添って一緒に考えて、アドバイスするっていうのが教員の大切な役割なんでしょうか。そういう点では、悲喜こもこも、「これでよかったのかな」という思いは、今でもありますね。

―生徒一人ひとりにアドバイスするとき、大事にしていることは？

「あなたは一番、何がしたいんですか」と、個人の意思を大切にすることです。やっぱり、自分のやりたいことを思う存分やっている時の、生徒の目の輝きっていうのは素晴らしいと思うしね。

―教師が保護者と関わる上で大事にしていることはありましたか。

教員と保護者は「共育者」という思いを持っています。

教員は教員の、保護者は保護者のそれぞれの役割を理解し合って、連携しなければならぬと思っています。

―生徒から学ぶことはありましたか。

深く話しているうちに、「エッ！」と驚くことがあります。話している時に、「この生徒って、優しいな」「深く考えているな」とかね。そういうのを発見できた時には、教員としても励まされます。

―生徒が成長する中で嬉しいなと感じた場面は。

退職してから、生徒の活躍を耳にしたり、特に用事もないけれども連絡をもらって交流する場面があるのが、一番嬉しいなと思っています。

―生徒が成長する中で嬉しいなと感じた場面は。

退職してから、用事もないけれども連絡もらって交流する場面があるのが一番嬉しいなと思っています。

―他校と比べて立命館守山の強みはありますか。

滋賀県の大学附属中高は、ここだけやと思うんですけど、勉強するには素晴らしい環境だと思います。

この学校って、世界に通用する学力を、中学・高校時代からしっかりと育てる学校です。社会に出た時に通用する力を、中学・高校の段階から見通す教育を展開していると思います。だから、自信を持って正課と課外活動に取り組んで欲しいですね。

―先生が教員時代、生徒一人一人の個性を活かすための教育は、どのようにされていたのですか。

生徒が、どのように知的好奇心を持って、どんなふうに探究心を発揮して学んでいるか、学習の過程を大事にしてきたつもりです。

―教育者として生徒の主体性を引き出すコツは？

よく議論をしましたね。「先生はこう思うけど、君はどう思うんや」

と。その中で、生徒は一生懸命考えて話してくれます。気持ちのキャッチボールをするのが大事です。

―対話することが大事とおっしゃっていたが、その重要性を生徒に伝えるためにした工夫は？

自ら授業に参加してもらい、主体的に学ぶ姿勢をつけてもらうことですね。たとえば、物理の実験レポートでは、課題を見つけて、分析する力を重視していましたね。

―教員同士の思いをどのように連携、繋げていったんですか。

お互いね、自由に夢を語り合う学校でありたい、と思っていたから、みんなでこういう学校にしたい、ああいう学校にしたいと議論を交わしていました。中高大一貫教育の学校なんで、受験教育に縛られない、一貫教育の優位性を生かした幅広い教育を展開できる教師集団でありたい、と思っていました。

学生時代（自分の中で自分を見つける）

―先生ご自身について聞きたいんですけど。教員を目指したきっかけは。私、大学の専門が物理です。企業に行くか、教職関係に進むか悩んだのですけど、物理を身近に感じて勉強しながら生きていこうと思って、教員を選びました。

―高校生の時に、やりたいと思ったことにつき進んで、大学でも勉強してきましたんですか。それとも、大学で勉強していく中で、自分のしたいことを見つけたんですか。

大学行つてね、自由な時間を持てるというのは、贅沢だと思うんですよ。大学は気分的な余裕があつてね。自分を見つめ直す時間もあります。じっくりと自分の将来を見直すことができる。そこから新たな出発が生まれる、と思っているんです。もちろん、高校からこうなるって進路を決めている人もいないけどね、僕は大学で様々な学問やいろんな人、本や文化に触れて、そこで自分のやりたいことを追求するっていうのは、本当に幸せなことと思う。今の若い人も、ぜひ経験して欲しいなと。この学校は受験勉強だけじゃなく、様々な学びができるわけやから、是非、自分に与えられた自由な時間をうまく使ってほしいと思います。

―先生は高校生の時、どんな生徒でしたか。

京都の公立高校でしたけど、自由でしたね。先生も何も言わなかったし、本当に自由でした。「大学へ行きたいんやったら、自分で計画的に勉強しなさいよ」ってね。希望するなら補習もしてあげますよ、っていう感じでした。

―高校生の時、必死で打ち込んでいたことありましたか。

いろんなことやってたね。夏休み、旅行したり、映画に行ったり。一人で旅行行つてたら声を掛けてくださる方がいてね。そういう人の温かさっていうか人間っていいなっていうのも思っていたね。

―高校時代に影響を与えられた人や出来事がありますか？

友人とよく議論したのは覚えています。その続きで、「生徒と議論したいな」と思うようになったのでしょかね。人との交流や切磋琢磨は大事だと思います。

教育者として

―教育者としての座右の銘は？

考えたことないですね

―今、パツと思いつくのは？

「共に生きる」とか、「共に成長する」とか。生徒は生徒で、教員は教員で、共に議論したり、切磋琢磨して育ったら一番いいな、と思っっています。

―教育観と未来への思いをお聞きたいと思っています。抽象的になっちゃいますけど、教育とはなんだと考えてますか。

難しいね。人間が人間らしく生きていくための力をつける場やと思います。

―生徒に大事にして欲しいものはありますか。

自分に正直に、大いに議論をし、大いに交流して、生き生きと若者らしく目を輝かせて、目標に向かって進んでほしいですね。それが一番大事やと思いますね。遠慮もせず話せる友達も、たくさん作って欲しい。

―AIが教育に与える影響について、何か考えますか。

AIを学ぶのではなく、AIで学べという事です。AIは手段、道具ですね。道具は道具らしく使ったらいいんです。逆に、道具に振り回されたらダメなんです。だから、どれだけ私たちはAIを理解できているのか、これから勉強していかなければなりませんね。

車という道具はね、移動手段として便利ですよ。でも、使い方を間違ったら凶器になるしね。それと全く同じ理屈だと思います。

もう一つは、昔は馬車しかなかった時代に自動車ができましたよね。

「私はずっと馬車しか使いません」という人もいたかもしれませんが。でも、やっぱり、人間って便利なものに移っていきますよね。

AIは活用して、AIによって私たちはより豊かに暮らす。AIという道具を使って、より人間らしく暮らすということが一番大事だと思います。たとえばAIの活用によって得られた余暇を有効に利用するとか。

―この学校でもグローバル教育がありますが、そこで大事だと思うことはありますか。

語学ができるのも大事やけど、その語学力をうまく活用して、自分なりに世界にアピールする主張や考え方を持つことも大事だと思いますね。

立命館学園では国際教育が進んでいますよね。語学を道具として、どのような国際人に育っていくのかが問われています。外国語の運用能力に加えて、異文化理解力やリーダーシップなど、世界に通用する能力を見つけていくことが大事だと思います。

―失敗から学ぶ力っていうのはどのような点で活かせるのか？

失敗して、人に言うのが恥ずかしいな、あるいは、自分自身本当に力がないのかな、とか思いがちです。でも失敗することで、今まで経験しなかった世界が見えてくる可能性がありますよね。それとしっかり向き合えれば、また次の展開につながっていきます。若い時の失敗って本当に力になるし、バネにして欲しいなと思います。一生懸命頑張っても失敗したり、あるいは到達できなかったりした時に、もう一回自分を見つめ直して、再チャレンジしていこうという、その繰り返しで大人になっていくと思います。私自身も、いっぱい失敗しましたしね。大事な事だと思います。

―失敗した時、どう立ち直れば？

やっぱり、逃げないことやね。失敗したからって、自分のしたい事をやめてね、次の展開をするっていうのも一つの方法かと思っています。でもやっぱり、失敗して、もう二度再チャレンジしようという力は、若者やから粘り強くできると思います。本当に若い人には、夢を追いかけて欲しいなと思います。挑戦しなければ、何も始まらない」という言葉がありますよね。挑戦すれば、また新しい目標や新しい成果をつかむことができますよ。挑戦した分、その時に悩んだことが次のステップに役立ちます。ぜひ、立命館守山中高の環境の中で、いろんなことに挑戦してください。

―教育者として生徒の主体性を引き出すコツは？

生徒とは、よく議論をしましたね。「先生はこう思うけど、君はどう思う」と。答えがすぐに見出せない問題にもチャレンジして、一生懸命考え、議論する。知的好奇心や探究心を培って欲しいと思います。

余談

―物理教えられてたつてことですけど、私選択で物理とっているんですけど正直苦手です。私みたいな生徒には、どういう教え方されてたんですか。

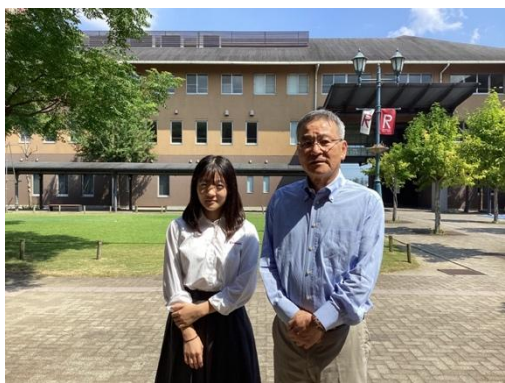
高校物理では、まず、机からの「抗力」ですよ。そして地球の「重力」と答えれば正解です。でも実際は、空気の圧力も受けていますよね。空気があったら浮力もありますね。周りの物体からの引力も受けています。それでも、教科書を通して実際に私たちが高校で学んでいる物理学は、「力のつり合い」を単純化して、「抗力」と「重力」だけで捉えています。単純化してでも伝えたいことは、複雑に見える自然現象を、物理の基本法則とモデルで一気に説明できる素晴らしさでしょう。そんな物理の魅力を生徒と共有したい思いで、授業を展開していましたね。

―自分の話になるんですけど、大学の学部ってどう決めたらいいのかわからなくて。

どう決めたらいいのかわからないのなら、自分がしたいと思うことを、最優先すべきです。本当にやりたいことは、自由な時間がある大学の中で、じっくり見つけていけば良いと思います。

―なるほど。今日はお時間頂きありがとうございました。

【感想】 失敗を恐れずに挑戦する事の大切さを学べた。高校時代を生きていく上で人と接して人からの暖かさを受けて成長する事があったとお話を聞き、私も人の温かさを大切にして生きていきたいと思いました。また、大学生になって多くの時間がある中で有意義な時間を自分から作り、したい事にひたむきになって突き進みたいと思いました



右手：語り手 小島敏夫さん
左手：聞き手 松田藍那